

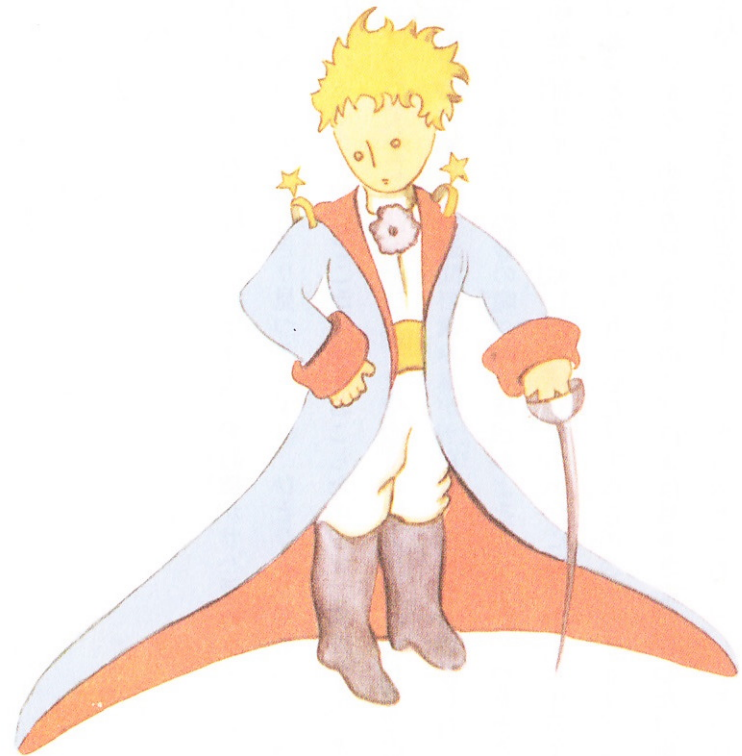
うすを、すぐそばで見ました。でも、ぼくの考えは、たいしてかわりませんでした。

どうやらものわかりのよさそうな人に出くわすと、ぼくは、いつも手もとに持っている第一号の絵を、その人に見せました。ほんとうにものわかる人かどうか、知りたかったのです。ところが、その人の返事は、いつも、〈そいつあ、ぼうしだ〉でした。そこで、ぼくは、ウワバミの話も、原始林げんしりんの話も、星の話もやめにして、その人のわかりそうなことに話をかえました。つまり、ブリッジ遊びや、ゴルフや、政治せいじや、ネクタイの話をしたのです。すると、そのおとなは、〈こいつあ、ものわかりのよい人間だ〉といって、たいそう満足まんぞくするのです。

ぼくは、そんなわけで、六年まえ、飛行機ひこうきがサハラ砂漠さばくでパンクするまで、親身になって話をするあいてが、まるきり見つからずに、ひとりきりで暮くらしてきました。パンクというのは、飛行機のモーターが、どこか故障こしょうをおこしたのです。機関士きかんしも、乗客じようきやくも、そばにいないので、ぼくは、むずかしい修理しゆりをひとりやってのけようと思いました。ぼくにとっては、生きるか死ぬかの問題でした。一週間の飲み水が、あるかないくらいでした。

そこで、はじめての日の晩ばん、ぼくは、およそ人の住んでいるところから、千マイルもはなれた砂地すなちで眠ねりました。難船なんせんしたあげく、いかだに乗って、大洋のまん中をただよっている人より、もつともつとひとりぼっちでした。すると、どうでしょう、おどろいたことに、夜があげると、へんな、小さな声があるので、ぼくは目をさしました。声は、こういっていました。

「ね……ヒツジの絵をかいて！」



これが、ぼくがあとになってかきあげた、一ばん上での、
そのぼっちゃんしょうぞうの肖像しょうぞうです。

「え？」

「ヒツジの絵をかくて……」

ぼくは、びっくりぎょうてんして、とびあがりました。なん度も目をこすりました。あたりを見まわしました。すると、とてもようすのかわったぼっちゃんが、まじめくさって、ぼくをじろじろ見ているのです。まえのページの絵をごらんなさい。これが、ぼくがあとになってかきあげた、一ばん上での、そのぼっちゃんしょうぞうの肖像しょうぞうです。ぼくの絵は、もちろん、実物じつぶつとくらべると、月とスッポンです。でも、それは、ぼくのせいじゃありません。六つむっつのとき、おとなの人たちに、絵かきで身を立てることを思いきらされたおかげで、ウワバミの内がわと外がわの絵をかくよりほかは、まるきり絵をかくことしなかったぼくなんですから。

そこで、ぼくは、おどろいたあまり、目をまんまるくして、ぼくの前にあらわれたぼっちゃんをながめました。くどいようですが、ぼくは、およそ人の住んでいるところから、千マイルもはなれているところにいたのです。だのに、ぼくのぼっちゃんしょうぞうは、道にまよっているようすもないし、つかれきっているようすもないし、おなががへってたまらないようすもないし、の

どがカラカラになっているようすもないし、こわくてたまらないようすもありません。どこからどう見ても、およそ人の住んでいるところから千マイルもはなれている砂漠さばくのまん中で、とほうにくれている子どもとは、とても見えないのです。ぼくは、やっと口がきけるようになる
と、いいました。

「だけど……あんた、そこで、なにしてるの？」

すると、ぼっちゃんは、とてもだいじなことにように、たいそうゆっくり、くりかえしました。

「ね……ヒツジの絵をかいて……」

ふしぎなことも、あんまりふしぎすぎると、とてもいやとはいえないものです。人が住んでいる、どんなところからも、千マイルもはなれていて、それに、いつ死ぬかもしれないところで、ヒツジの絵をかくなんて、とてもばかばかしい気もしましたが、ぼくは、ポケットから、一まいの紙と、万年筆まんねんひつをとりだしました。が、そのときぼくは、地理と歴史れきしと算数と文法ぶんぽうだけしか勉強しなかったことを思いだしたのです。そこで、そのぼっちゃんに（すこし、むっとしな

が）絵はかけない、といいました。すると、ぼっちゃんは、こう答えました。

「そんなこと、かまやしないよ。ヒツジの絵をかいて」

ぼくは、ヒツジの絵なんか、てんでかいたことがないので、ぼくにかけると、例の二つの絵の片方かたほうをかいてみました。ウワバミの外がわです。すると、ぼっちゃんが、こういうので、ぼくは、あっけにとられてしまいました。

「ちがう、ちがう！　ぼく、ウワバミにのまれてるゾウなんか、いやだよ。ウワバミって、とてもけんのんだろう、それに、ゾウなんて、場所ふさぎで、しょうがないじゃないか。ぼくんとこ、ちっぽけだから、ヒツジがほしいんだよ。ね、ヒツジの絵をかいて」

そこで、ぼくは、ヒツジの絵をかきました。

ぼっちゃんは、それをじつと見ていましたが、やがて、こういいました。

「だめ！　このヒツジったら、病気で、いまにも死にそうじゃないか。かきなおしておくれよ」

ぼくは、かきなおしました。



ぼっちゃんは、さも大目に見てくれるようにやさしく、にっこりしました。

「そうだな……これ、あたりまえのヒツジじゃなくって、ツノが生えてるもの……」

そこで、ぼくは、またかきなおしました。

でも、それは、まえのとおなじように、やっぱり、ぼっちゃんの氣にいきりません。

「これ、ヨボヨボじゃないか。ぼく、長生きするヒツジがほしいんだよ」

ぼくは、もうがまんしきれなくなってきました。

それに、モーターのとりはずしをいそいでいたので、大ざっぱにこんな絵をかきました。

そして、それをなげだすように、ぼっちゃんに見



せました。

「こいつあ箱だよ。あんたのほしいヒツジ、その中にいるよ」

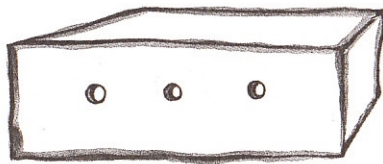
ぶっきらぼうにそういいましたが、見ると、ぼっちゃんの顔が、ぼっと明るくなったので、ぼくは、ひどくめんくりました。

「うん、こんなのが、ぼく、ほしくてたまらなかったんだ。このヒツジ、たくさん草をたべる？」

「どうして？」

「だって、ぼくんとこ、ほんとにちっぽけなんだもの……」

「そんな心配、いらないよ。だから、ぼく、ほんのちっぽけなヒツジ、かいたんだ」



ぼっちゃんは、絵をのぞいて見ながらいました。

「そんなにちっぽけじゃないな……おや！　ねちゃったよ、このヒツジ……」

こうして、ぼくは、王子さまと知りあいになりました。

3

王子さまが、いったい、どこからきたのか、それがわかるまでには、だいぶ時間がかかりました。王子さまは、ぼくにいろんなことをきくのですが、ぼくのきくこととなると、いつこう、きいているようがありません。ひょいとした拍子で、王子さまのいったことから、すこしずつ、ことがほぐれて、しまいに、やっと、いろいろなことがわかってきたというありさまです。たとえば、王子さまは、はじめてぼくの飛行機を見たとき（ぼく、飛行機の絵なんか、ごめんです。あんまりこみいってて、とてもぼくの手におえません）、こう、ぼくにききました。

「それ、なあに？　そのしなもの？」

「しなものじゃないよ。これ、飛ぶんだ。飛行機なんだ。ぼくの飛行機なんだ」

ぼくは、鼻を高くしながら、鳥のように飛べる人間だといってやりました。すると、王子さまは、大声をあげていました。